



TITLE:

地域性の形成論理

AUTHOR(S):

坪内, 良博; 石井, 溥; 加納, 啓良; 北原, 淳; 桜井, 由躬雄; 山下, 晋司; 田中, 耕司

CITATION:

坪内, 良博 ...[et al]. 地域性の形成論理. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 25-36

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187413>

RIGHT:

地域性の形成論理

1. 研究組織

研究代表者：坪内 良博（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：石井 溥（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

加納 啓良（東京大学東洋文化研究所・教授）

北原 淳（神戸大学文学部・教授）

桜井由躬雄（東京大学文学部・助教授）

山下 晋司（東京大学教養学部・助教授）

田中 耕司（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

2. 研究のねらい・目的

地域研究の対象である「地域」の社会および文化の独自性の形成にかかわる普遍論理と個別論理の交錯のメカニズムを、東南アジアおよびそれを挟む中国・インドの状況を手がかりとして解明することが本研究の大きな枠組みである。

東南アジアの顕著な特性の一つは、この地域が海域世界として成立し、かつ中国・インドという大人口地域の間で小人口状況を維持し続けるなかで、つねに「周辺」としての位置づけを与えられてきたことであるが、このことが現在の東南アジアの社会・文化編成に与えた影響はきわめて大きい。この研究では、伝統的な小人口状況における社会・文化編成論理を検討するとともに、19世紀以来の都市と農村の急成長をあとづけ、過密への移行過程にともなう社会・文化編成論理の持続性と、それらの変動的な新局面の諸相を考究して、東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムを明らかにすることを目的としている。

このために、本研究では、まず東南アジアの文化・社会の特性を説明するさまざまな概念をとりあげ、その厳密な検討と深化をめざすことにする。東南アジアの社会の特徴については、従来からさまざまなキーワードでそれを表現する試みがなされてきた。例えば、エンブリーの「ゆるやかな構造」、ファーニバルの「複合社会」あるいはギアツの「インポリューション」などである。それぞれのキーワードは、当然、これらを用いた研究者が明らかにしようとした特定の社会や現象との関連において用いられているものの、一度創られた概念がたちまち一人歩きを始めるというのがこれまでの通弊であった。すなわち、その使用にあたっては、(1)位相：どのような側面を説明しようとしているのか、(2)場所：どこに適用できるのか、そして(3)時間：どの時期に関して有効なのか、を吟味する必要があるといえよう。このような点に留意しながら、上記のものも含めて東南アジアの特性を示すさまざまなキーワードをとりあげて、

東南アジアの社会・文化編成の普遍論理と個別論理に迫ろうというわけである。

例えば、東南アジアの特性を自然環境と人口との関わりからとらえてみると、「小人口世界」「複合社会」「フロンティア世界」「稠密社会」というようなキーワードがそれに関連するものとしてあげられよう。低い人口密度を維持してきた東南アジアでは、自然環境としての森と海、そしてそれらと織りなされて形成された人々の生活空間が、都市を欠いた小さなコミュニティの結びつきからなる空間、すなわち「小人口世界」として存続したことをうかがわせる。一方では、19世紀前半以降の急速な人口増加のなかで、「小人口世界」には、変質していくものと、伝統的な様相を保っているものとの分化が際立つようになる。「複合社会」や「稠密社会」は「小人口世界」の変容のなかで現れた社会の特徴を表したものであり、「フロンティア世界」はその持続と変容の両局面に関連して現れる社会現象を共有する地理的広がりをもった空間といえよう。

また、人間と人間、あるいは集団と集団の関係という側面については、「ゆるやかな構造」「双系性」「圏」「ネットワーク」などのキーワードが浮かびあがってくる。これらには、東南アジア島嶼部あるいは大陸部デルタの一部を念頭に索出されたものや、特定の地域にとらわれないより抽象化された社会の編成原理として概念化されたものがあるが、東南アジア全域、あるいはそれを区分した下位の地域単位へのその適用可能性については厳密な検討が必要である。以上のような社会・文化の特徴を表すさまざまなキーワードを東南アジア各地の具体的事例に即して、そしてさらに東南アジア以外の地域との比較において掘り下げていくこと、これが第一のねらいである。

もう一つのねらいは、東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムに関わる側面を明らかにすることである。東南アジアがそのまわりの中国、インドの大人口、大文明にくらべて、つねに周辺的な性格を有することはすでに述べたが、こうした「周辺性」という観点の導入は、上述のようなキーワードのもつ地域的・歴史的な適用可能性を俯瞰するのに有意義であると考えられる。そして現在にまで連なる社会的・文化的事象がさまざまな位相をもった「中心と周辺」という関係性のなかで生起してきた過程をさらに明らかにする手だてとなろう。同じく、「エスニシティ」や「国家」、あるいは「農村と都市」というような枠組みも、こうした東南アジアの地域性のダイナミズムをあつかううえでの重要な視点となるにちがいない。東南アジアの地域性をこうした枠組みのなかで再検討し、その形成と変容の過程を明らかにすることがこの研究の第二のねらいである。

3. 平成5年度の研究経過

以上のようなねらいのもとに、東南アジア各地で調査を行ってきた研究者6名に、さらに南アジアをフィールドとする研究者1名を加えて研究班を組織した。初年度にあたる平成5年度には各メンバーが以下に述べる分担課題に沿った個別の研究を進めるとともに、研究班独自の研究会を3回開催して地域性の形成をめぐる問題の整理を行った。また、研究組織の大半が参加して座談会を開催するとともに、同じ研究項目に属する公募研究班（加藤班、水島班）との合同研究会を1回開催した。それぞれの研究会ならびに座談会の概要は以下のとおりである。

第1回研究会（5月15日、京大東南アジア研究センター）

各メンバーのこれまでの調査経験にもとづいて役割分担課題を打合せ、下記のような課題をそれぞれ設定した。また、平成5年度の研究実施計画を打合わせた。

坪内良博：全体の総括、および「小人口世界」の形成とその世界に固有の社会編成論理の検討。

石井 溥：地域性と外文明、とくにネパールを対象としたインド・中国両文明の中間地域（周辺地域）における地域性と、東南アジアのそれとの比較。

加納啓良：ジャワにおける「稠密社会」形成の歴史とその出現の意味、および国民国家形成のもとでのその変貌過程の分析。

北原 淳：村落社会を対象とした「狭い」範囲の地域性の形成論理、とくに近代化ならびに都鄙関係の展開のなかでの共同体論、村落論の再検討。

桜井由躬雄：地域性形成の条件、とくに「歴史圏」の形成から現代東南アジアの地域性形成に連なる過程の歴史的検討。

山下晋司：エスニシティと地域性、とくに歴史的状況のなかで「創出されるもの」としてのエスニシティの視点からみた東南アジアの地域性の検討。

田中耕司：「フロンティア世界としての東南アジア」概念の妥当性、とくに東南アジアの開拓社会における「フロンティア」概念の適用可能性の検討。

座談会（6月18/19日、京大東南アジア研究センター）

研究組織のうち、坪内、石井、加納、桜井、山下の5名によって、「文明と地域性」というテーマで座談会をもった。季刊誌『総合的地域研究』第2号の掲載記事を準備するために企画された座談会であったが、東南アジアの地域性をとらえるうえでの基本的な論点をメンバーのあいだで確認するよい機会となった。

話題は多岐にわたったが、東南アジアの小人口状況あるいは「相対的な空白地帯」という

「原地域性」がいかにして「地域性」に連なるのかという問題設定が行われ、それをふまえて地域性の概念について議論が展開した。まず、文明という普遍性に対する個別性や特殊性、すなわち文化としてこれをとらえ、それを共有する地域のまとまりを「歴史圏」としてとらえる立場が提唱され、地域性はこうした歴史的な結果として形成されるという考えが出された。また、複数の文明の交差は世界に普遍的にみられる現象であるが、それらが交差する「関係性」そのものが地域を形成するとすれば、それこそが東南アジアの地域性にほかならないという考えも出された。このことは東南アジアとネパールとの比較という枠組みでも再び議論され、外来の文明とそれを受容して変容をとげた文化とのダイナミズムのなかから固有の地域性をとらえるという視点へと議論が展開した。議論はさらに、文化の多様性と地域性、民族と地域性、国民国家と地域性という問題に入っていくが、座談の全体は、テーマのひとつである「文明」にいささか引きつけられすぎたというきらいがないでもない。その末尾で「『文明』を『地域』が変容していくメカニズムを中心に今後の研究を展開していきたい」と座長によって締めくくられているように、文明のもつ普遍性よりも、個別の地域における「地域性の形成」のダイナミズムの把握と説明こそがこの研究班の目標であることを再確認して座談を終えた。

第2回研究会（9月11日、京大東南アジア研究センター）

「地域性の形成をめぐる」というテーマで研究分担者5名が研究発表を行った。発表者・テーマは以下のとおりである。

田中耕司「フロンティアと境界：東南アジア島嶼部の事例から」

北原 淳「都市・農村関係の新局面——タイの調査経験を中心に」

加納啓良「地域単位としての『ジャワ』の形成とその特質」

山下晋司「東南アジアにおける歴史とエスニシティの動態」

石井 溥「地域差と地域性——南アジアの片すみからの考察」

いずれも各自の分担課題に沿った問題意識と今後の研究計画を語るという趣旨のもとに発表を行った。田中は、インドネシアの南スラウェシ州で行ってきた農民移住と開拓に関する調査をもとに、開拓論からフロンティア論への関心の推移、そして東南アジア域内および域外との開拓フロンティアの比較研究から東南アジアの地域性を明らかにしようとする今後の研究方向を披瀝した。北原は、タイにおける急速な地方都市の発展という状況のもとでは従来のコミュニティ調査の手法にすでに限界がみられるとして、チョンブリーでの労働力市場の調査を具体例に、共同体論・村落論の再検討に着手していることを報告した。加納は、稠密社会ジャワの形成過程をとらえる手法としてジャワの「内側からの観察」と「外側からの観察」という二つ

を示し、経済史研究の立場から、東南アジアのなかではきわめて特殊な世界として成立したジャワの地域性に接近しようとする方向を提示した。山下は、植民地主義や国民国家のなかでのエスニシティの生成、あるいは今日的なエスニシティの政治化と商品化の問題を論じたうえで、実体論ではなく状況論としてのエスニシティ論から地域性に迫ろうとする問題意識を述べた。最後に、石井は、インド・中国両文明圏の中間地域としてのネパールをとりあげ、「地域差」と「地域性」という概念を手がかりにしながら、民族、言語、宗教、カーストなどに言及して地域区分の手法やその意味を問いかけた。

合同研究会（11月13日、東大東洋文化研究所）

「地域性の形成をめぐる（第2回）」のテーマで、A02研究項目の二つの公募研究班、加藤班（植民地都市の社会史）と水島班（複合社会の形成原理に関する基礎研究）と合同で開催した。発表者・テーマは以下のとおりである。

桜井由躬雄「北部紅河デルタにおける居住史」

水島 司「ペラにおける土地政策の展開」

前回の研究会と同様、各メンバーの問題意識と今後の研究計画を披瀝する会となった。桜井は、東南アジアにおける稠密人口地域の一つである紅河デルタをとりあげて、デルタの開拓史と集落形成の地域的展開を整理した。また、水島はマレー半島ペラ州の調査から、土地所有の観念をめぐる問題を提起した。

第3回研究会（1月10日、長崎大学医学部）

「地域性の形成論理をめぐる——東南アジアにおける非東南アジア的地域からの発想」のテーマで、東南アジアにおいて歴史的にもっとも人口稠密な地域を形成してきた二つの地域、ベトナム北部の紅河デルタとジャワをとりあげて、これら両地域の地域性の形成過程を論じた。発表者・テーマは以下のとおりである。

加納啓良「インドネシアの『ジャワニサシ』——農業・農村変化の視点から——」

桜井由躬雄「ベトナムにおける新出資料の紹介——とくに村落地方文書について——」

加納の報告は、稠密社会ジャワのインドネシアにおける拡大・浸透（「ジャワニサシ」）を農業・農村の変化のなかで展望しようとしたものである。ジャワを軸としたインドネシアの概念的な地域区分、すなわち〔内-外インドネシア〕軸と集約稲作展開の〔中核-周辺〕軸の両座標軸によって区切られる4つの地域区分〔内核地域（ジャワ、バリ）、外核地域、内辺地域、外辺地域〕にもとづいて、稠密社会の形成過程やその今日的な変容を分析し、インドネシアの地域性論議に経済史の側面から接近しようとした。また、桜井は、ベトナムで近年利用可能に

なった大量の村落地方文書によって過去約200年にわたる村落レベルの社会・経済史研究に新たな展望が開けつつあることを紹介して、東南アジアのもう一つの稠密社会である紅河デルタの地域成立の過程に迫る手法を提示した。いずれも、両報告者の前回発表の問題意識を具体例によって展開しようとしたもので、今後の研究実施にあたっての各メンバーの方向性を示唆する好発表であった。

以上の研究会等の他に、総括班が主催した第2回研究集会「地域性の形成をめぐる」（2月4日～5日、京都にて開催）を総括班とともに企画し、東南アジア以外の地域との比較において「地域性」の概念や「地域性」の形成に寄与する要因、そして各地域の「地域性」とは何か、等の問題を探ることにした。中国、アフリカ、中東、南アジア、東南アジアの研究者からの問題提起とそれに対するコメントというかたちで議論が展開した。この研究集会の記録は、別途、総括班によってまとめられる予定である。

また、上記の座談会の記録が季刊誌『総合的地域研究』第2号に掲載されていることはすでに述べたが、同誌には、坪内、田中、北原の3名がそれぞれの分担課題の紹介と問題意識をまとめた短報を報告した。坪内の報告は「小人口世界への旅」と題して、インドネシアの西カリマンタン、カプアス川流域で観察した「小人口状況」下でのコミュニティの統合や外来文明要素の流入を論じたもので、他の地域ではすでに希薄になった「小人口世界」の諸特徴がカリマンタンではまだ色濃く残存することを紹介している。田中の「フロンティア空間としての東南アジア」は、最近のラオス北部への調査旅行での見聞を一例として紹介しつつ、東南アジア各地の「フロンティア空間」に共通する社会・文化的特徴を論じたものである。北原の「村落社会の形成論理と『共同体』の概念」は、近年の共同体概念の再評価の潮流を紹介しながら、村落社会の形成に関わる一要因として国家のような政治組織やNGOのような民衆運動が戦略的にとりあげる共同体概念があることを指摘して、「地域性の形成論理」の内容をタイ村落開発論としての「共同体の文化」論に即して吟味しようとする方向を述べたものである。

4. 研究の成果とフロンティア

以上のように、平成5年度は主として研究会の開催を通じて分担課題に即した個別研究の成果を共有することにしたが、初年目としては概ね順調に研究活動を開始できたと判断している。ただ、共通のテーマである「地域性の形成論理」にどれほど肉薄できているかは今後3年間の共同研究の成果をまたざるをえないが、少なくとも、「研究のねらい・目的」の項に掲げた問題意識が共有され、それへの接近が各メンバーの現在進行形の臨地調査や史資料調査によって

達成しうる見通しが得られたことはこの1年の大きな前進であったといえよう。今年度に得られた成果については前項の「研究経過」の内容と一部重複する部分もあるので、ここでは研究組織のメンバーそれぞれがまとめた「研究の成果とフロンティア」を引用して、初年度の成果を概括することにした。

坪内良博：研究代表者として今年度の成果全体を簡単にまとめると次のようになる。まず、研究目的を達成するための手がかりとした東南アジアの小人口状況に関わって、緩やかなネットワークで成り立つ社会の形成論理を「圏」という概念でとらえることが提起された（坪内）ことである。この「圏」については、ある共通の歴史的経験が一つの社会圏（歴史圏）を形成するという地域のとらえ方（桜井）と対比しつつ、さらにその概念の精緻化がはかられることになる。また、同じ小人口状況という問題に関わって、フロンティア論（田中）や村落共同体論の再検討（北原）が行われるとともに、ジャワやベトナムのような人口稠密地域の形成についても分析が開始された（加納、桜井）。研究目的達成のためのもう一つの手がかりとした大文明の「周辺」という地域の特徴に関わる点としては、諸文明と東南アジア基層社会との出会いから「エスニシティ」形成の問題に迫ろうとする試み（山下）や、東南アジア以外の地域（ネパール）の周辺性との比較論が提起された（石井）。以上のように、いずれも次年度以降に引き続いて考究されねばならない課題であるが、研究課題に関わる多くの切り口が今年度の研究のなかから提起されたことが、今年度の成果として要約できよう。

石井 博：地域性の形成の論理を考究する研究の一環として、周辺地域における地域性のあり方について、南アジアとくにネパールを参照する形で考察を深めた。当該地域は東南アジアと同様にインド、中国両文明の中間地帯をなし、また、言語文化面でも大語族の接触地帯を形成するが、一方、東南アジアとは対照的に、陸封的条件をもち、高度差に関わる環境条件の差異が大きく、さらに社会的にはカースト制の影響が無視できない。そのような条件を念頭におき、「地域差」と「地域性」のふたつの概念を手がかりとして分析を進めたが、そこでは地域差は大変に重層的な形であられ、また、地域差を示す「地域」の範囲は互いにクロスカットすることもあることが明らかになった。また、この（カーストを擁する）世界において、人々のアイデンティティ形成のうえで「地域」はそれほどの重要性をもたないのではないかと観点も浮上してきたが、これはさらに南アジアの他地域に関しても検証されなければならない問題である。

加納啓良：もともと小人口世界としての特徴をもつ東南アジア地域のなかに、例外的な「稠密社会」として形成されたジャワ島の農業生産方式が、1970年代以降の「緑の革命」の進展と

ともに、ますます集約化の度合いを高め、インドネシアのジャワ島以外の、いわゆる「外島」地域にも移植・拡張されつつある様子を、農業生産統計の検討によって確認した。この結果、ジャワ、バリなどからなる「内インドネシア」地域の「内核」地帯としての発展が進むとともに、外島の大半の地域を包括する「外インドネシア」地域のなかにも「外核」としての米作核心地域が形成されつつあること、またより辺境に位置する「外辺」地域でも、ジャワ、バリからの移民の増加によって「ジャワニサシ」（ジャワ化）という名のもとに生活様式の国民的画一化が起こりつつあることを指摘した。この、農業における「国民統合」の意義と限界が、次に問われるべき問題である。

北原 淳：村落社会を中心として、もっとも狭い範囲の地域性の形成論理を検討した。村落社会は、原始共同体に典型的なように、もともと孤立的な自給自足的自治組織であったが、のちに外部の政治権力や市場経済が発展してそのなかに包摂された、と理解されている。しかし歴史上の村落社会は、むしろそれら外部の権力や市場によって、あるいはそれとの関係のなかで、地縁的組織を形成したとも考えられる。それは植民地時代以降だけでなく、それ以前にも妥当する場合もある。以上のような点に照らして、現在のNGOによるタイ開発運動の理論家の共同体論、村落論を批判的に検討した。彼らの孤立的自立的村落という主張は実証的には支持できないが、外部と交渉する能力をつけるための政策や運動の理論としては評価されうる。

桜井由躬雄：東南アジアの「歴史圏」という概念が成り立つかどうかを考えている。歴史圏とは共通の歴史経験をもったとする認識が、一つの社会圏を形成することである。それは同一の（類似ではなく）社会現象なり、政治現象なりが、同時期に発生した地域の全体として存在する。例えば、7～8世紀におけるマラッカ海峡周辺のいわゆるシュリヴィジャヤ6碑文の分布などは、その出土地で囲われる地域が一つの歴史圏を形成し、これが後世のいわゆるムラユ世界の形成の原型となったことは否定できないだろうし、例えば13世紀のモンゴルの雲南進出に抵抗した八百媳婦などは、対元抵抗タイ人連合としての歴史圏を形成し、それが現在にいたるルー、ユアン、シャン、ラーオ世界の親縁性の基盤となっていよう。つまり、東南アジアの歴史圏が、ある歴史状況のもとに構成され、それが近世の民族世界の原型となり、やがて現代東南アジアの地域性の形成へと連続する過程を考えたい。

山下晋司：エスニシティをキーワードにして、「地域性の形成論理」を明らかにすることが私に課せられた課題である。初年度である本年においては、まずエスニシティ概念の検討を行い、ついでとくに歴史のなかでのエスニシティの動態に焦点をあてて研究を進めた。その結果、エスニシティを本源的な立場（いわゆる“essentialist”と呼ばれる立場）からとらえるより

も、ある歴史的状況のなかで「創出されるもの」という立場からとらえた方が適切であることが明らかになった。

田中耕司：東南アジアの地域性を「フロンティア」概念によって考えようとするのがこの計画のなかでの私の課題である。開拓社会では、そこに参入する人たちがあるいはそこで交差する人たちのなかに「フロンティア性」とよべるような社会・文化状況が観察される。この「フロンティア性」を共有する社会が、実は、開拓の最前線だけでなく、東南アジアの社会に広く見られることから、東南アジアの地域性として「フロンティア社会」というとらえ方ができるとを検討した。

5. 今後の課題

以上に述べたような平成5年度の研究経過および各メンバーが抱えている問題意識をもとに、次年度以降は、東南アジアの地域性に関わる諸概念のさらなる精緻化と具体的事例に即した研究手法の確立を目指すことになる。当面する課題、あるいは今後の研究の進め方についても各メンバーがまとめたものを引用することにするが、次年度以降は、こうしたそれぞれの課題をめぐって、共同研究としての内実を充実させるとともに関連する他の研究班との交流をさらに進めることにしたい。

坪内良博：研究代表者として、それぞれの研究分担者の課題と研究内容が相互に関連した形で収斂の方向にむかうように努力する。一研究者の立場からは、「小人口世界」としての東南アジアに焦点をしぼり、19世紀を中心としてその小人口状況の実態と観察者の観念とを整理する作業にとりくむと同時に、そこから導出される諸現象を関連づける作業をおこなう。

石井 博：東南アジアと南アジアを比較対照して地域性の形成に関する通地域的な理論を構築するために、以下のような点を明らかにすることが特に必要であると考えられる。(1)生態、宗教、言語文化、民族、カースト、政治経済条件を視野に入れ、南アジア全体、およびその下位地域における地域差の存在を具体的に明らかにする。(2)南アジアにおいて摘出した地域差、地域性のあり方を東南アジアのそれと比較し地域差、地域性のあらわれ方の一般性と個別性についての分析を深める。(3)さまざまな地域差を示す重層したレベルのなかで、特にきわだって凝縮した意味内容を有する「地域」のレベルを(南アジアにおいて、また一般的に)特定できるかどうかを考察する。

加納啓良：大きく、次の3つの課題を設定したいと考えている。(1)ジャワにおける「稠密社会」形成の歴史的起源と過程を、おもに19世紀前半の地稅制度導入期の農村に関する史料を用

いて検討すること。(2)近現代の東南アジア地域全体のなかでのジャワの国際経済的地位とその変化を、おもに貿易統計の検討を通じて探り、よりグローバルな視野から「稠密社会」出現の意味を考え直すこと。(3)ジャワ自身における工業化と都市化の進展によって起きている農村経済の変化と、外島の辺境地域にまで浸透することによって発生している問題の両面から、ジャワ型の集約的水田稲作農業が直面しつつある限界とその変貌の可能性を探ること。

北原 淳：村落形成と小地域の地域性形成を今日的なタイの状況を素材に追究する。そのために以下の課題を設定している。(1)N G O運動理論家の対象を広げて彼らのテキストを整理、分析して彼らの共同体理論を明らかにしていく。(2)国家による農村社会の包摂の実態を、19世紀後半の徭役制度を対象として検討する。(3)村落社会が外部と関係する場合の意識、認識の構造について検討を試みる。

桜井由躬雄：北部ベトナム紅河デルタにおける歴史圏の形成について考えたい。紅河デルタは東南アジア全域の農業環境にくらべてきわめて異質である。この異質性の形成を、この「亜地域」の最初の歴史圏の形成と考える。漢代の交趾郡や唐代の安南都護府には、紅河デルタ歴史圏はまだ形成されず、おそらく13世紀以降の堤防建設時代に独特な歴史圏が形成されたものとする。現在の課題はこの紅河デルタ歴史圏は果たして、15世紀以降形成されるベトナム民族世界と関係するものかどうか、またベトナム社会主義共和国の形成といかに連関するかである。このために、ベトナム村落調査と他地域との比較のための文献調査を進めることにする。

山下晋司：平成5年度の成果をふまえて、次年度以降は東南アジアのより特定の歴史状況のなかでのエスニシティの形成を問題にしてみたい。この場合、私は東南アジアにおいてはとくに文明の波及がエスニシティ形成の要因になるのではないかという仮説をもっている。それゆえ、ヒンドゥー文明・中国文明・イスラーム文明・ヨーロッパ近代文明といった歴史をとおして東南アジアに波及してきた諸文明と東南アジアの基層社会との出会いをエスニシティという視点から取り上げていく。

田中耕司：「フロンティア」概念の東南アジアへの適用可能性および実態に即した「フロンティア社会」の分析が今後の課題である。前者については、(1)東南アジア各地における「フロンティア社会」および「フロンティア状況」の比較、(2)東南アジアと他地域とのそれらの比較、そして(3)東南アジアの社会・文化の文脈のなかでの固有の「フロンティア」概念の索出、などが具体的な研究課題として追究されることになる。そして、後者については、当面、開拓社会における資源と人間・社会との関係、とくに土地資源をめぐる「フロンティア状況」の分析に力を注ぎたい。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

坪内良博

「地域性の形成論理」『総合的地域研究』創刊準備号：11-13, 1993.

「小人口世界への旅」『総合的地域研究』No. 2：9-11, 1993.

「専門分野と地域研究」矢野暢編『講座現代の地域研究第1巻 地域研究の手法』弘文堂, pp. 49-69, 1993.

「圏——伸縮する社会単位」矢野暢編『講座現代の地域研究第3巻 地域研究のフロンティア』弘文堂, pp. 129-151, 1993.

「農村の変化と無変化」矢野暢編『講座現代の地域研究第4巻 地域研究と「発展」の論理』弘文堂, pp. 93-116, 1993.

石井 博

「〈ネワールの〉な国から〈ネパールの〉国家へ——南アジアにおける多民族・多言語社会の国民形成」飯島茂編『せみぎあう「民族」と国家——人類学的視座から』アカデミア出版会, pp. 131-159, 1993.

“Seasons, Rituals and Society : the Culture and Society of Mithila, the Parbate Hindus and the Newars as seen through a Comparison of their Annual Rites.” In *From Vedic Altar to Village Shrine (Senri Ethnological Studies, No. 36)*, ed. by Y. Nagano and Y. Ikari, Osaka : National Museum of Ethnology, pp. 35-84, 1993.

“Agricultural Labour Recruitment among the Newars and other Groups in the Sub-Himalayan Areas.” In *Anthropology of Tibet and the Himalaya (Ethnologische Schriften Zurich, ESZ 12)*, ed. by C. Ramble and M. Brauen, Zurich : Ethnological Museum of the University of Zurich, pp. 124-137, 1993.

加納啓良

「中部ジャワ農村経済の構造変容——サワハン区再調査から」梅原弘光・水野広祐編『東南アジア農村階層の変動』アジア経済研究所, pp. 89-117, 1993.

「ジャワのヨーマンリー？——農民甘蔗作発展史序説」秋元英一他編『市場と地域——歴史の視点から』日本経済評論社, pp. 83-110, 1993.

北原 淳

「タイ研究における“Loose Structure”概念」『東南アジア 歴史と文化』22：180-200, 1993.

「共同体理論再考——共同体再評価論を手がかりに——」秋元英一他編『市場と地域——歴史の視点から』日本経済評論社, pp. 53-81, 1993.

「村落社会の形成論理と『共同体』の概念」『総合的地域研究』No. 2：18-20, 1993.

桜井由躬雄

『地域からの世界史第4巻 東南アジア』（石澤良昭・桐山昇と共著）朝日新聞社, 261, pp. 1993.

「ホーチミン」『英雄たちのアジア（別冊宝島）』JICC出版局, pp. 70-88, 1993.

「シハヌーク」『英雄たちのアジア（別冊宝島）』JICC出版局, pp. 200-211, 1993.

「メコン河の人々」『地理』38（9）：18-29, 1993.

「東アジアと東南アジア」『国際交流』62 : 445-453, 1993.

山下晋司

「クレオール文化の可能性」『月刊アドバタイジング』1993年4月号, pp. 28-31, 1993.

「楽園パリの演出——観光人類学覚書」清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア③・近代に生きる』東京大学出版会, pp. 139-152, 1993.

「トラジャ」綾部恒彦監修・信濃毎日新聞社編『世界の民——光と影』（上）明石書店, pp. 209-219, 1993.

『アジア読本・インドネシア』（宮崎恒二・伊藤眞と共編著）河出書房新社, 1993.

田中耕司

「インドネシアの最近の農業事情と経済発展」『農業と経済』59 (8): 45-54, 1993.

「フロンティア空間としての東南アジア」『総合的地域研究』No. 2 : 12-14, 1993.

“Farmers’ Perceptions of Rice-Growing Techniques in Laos : ‘Primitive’ or ‘Thammasat’ ?”
Southeast Asian Studies, 31(2) : 132-140, 1993.

「拓かれる生活空間」矢野暢編『講座現代の地域研究第3巻 地域研究のフロンティア』弘文堂, pp. 101-127, 1993.

「フロンティア社会の変容」矢野暢編『講座現代の地域研究第4巻 地域研究と「発展」の論理』弘文堂, pp. 117-140, 1993.

「森と野の狭間——東南アジアの熱帯雨林から——」梅原猛・安田喜憲編『森の文明・循環の思想』講談社, pp. 98-124, 1993.